

その位置で手をふり、合掌して踊ることに異色がある。恐らく盆踊りはそれから発達して、右廻りとか左廻りになつていったのであらうと思われ、その点から、盆踊などの原型をみる感じがする。ひよっとこ、おかめなどのどうけも仮装面に出て踊の間をぬうて歩くから、この点からは明らかに芸能の形態を備えているともみられる。

この念仏踊りの一部が葬式につく場合があるが、これには踊はつかないで、勤行の一部に太鼓が打たれるのみである。老人を主としているため、後継者がなくて困っているようである。

寒念仏という真冬の行は、僧侶がやったようで別個のものである。

三、玄如節・万歳その他

玄如節は単なる即興詩のかけあいだけでなく、かけあんどんを吊して、輪になつて踊っていたから、民俗芸能の形態をもつていたとみられる。両堂の不動堂のおひいち、その他で行なわれていたが、これを復興することは容易でない。踊が終つてからも、籠堂などで、終夜爺さん、婆さんが、即興詩のかけあいをしていた風景なども、明治末頃までは見られたようである。

会津万歳も今失われようとしているが、現在寄席やテレビで見られる新作かけ合い万歳とはちがつて、祝いや葉のはいった、伝統のあるものであった。

これは各家の入口に立つて、太夫と小僧が祝詞・祈願を述べるのをかどつけ万歳と呼び、座敷に上つて、踊りのはいるのを座敷万歳といっている。中荒井などにも、他の村と組んで、かどつけ万歳をした人があった。

その主なものはこがい万歳で、養蚕の予祝祈願で、正月に雪の降らない中通り地方に、冬の出稼ぎのように、